第24回東京都中学校美術教育研究大会

第3ブロック(中野・練馬・杉並)中野大会

大会報告集

みんなの美術

～感動と創造は未来を拓く～

コンピューター室にて

中野富士見中学校

平成18年11月17日(金)

中野区立中野富士見中学校

目 次

項目	ページ
１　大会要項と内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	１ ～ ２
２　基調提案 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	３ ～ ４
３　記念講演 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	５ ～ １０
４　研究授業・研究協議	
研究授業　１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	１１ ～ １２
研究授業　２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	１３ ～ １５
研究授業　３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	１６ ～ １８
研究授業　４ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	１９ ～ ２１
研究授業　５ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	２２ ～ ２３
研究授業　６ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	２４ ～ ２５
５　講評	
誌上発表について ・・・・・・・・・・・・・・・・・	２６
実践発表について ・・・・・・・・・・・・・・・・・	２７
研究授業について ・・・・・・・・・・・・・・・・・	２８
６　全体会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	２９ ～ ３１

美術教師の願いは、すべての生徒が
人間らしい豊かな感性をはぐくむこと
（基調提案より）

大会要項と内容

（１）テーマ　「みんなの美術～感動と創造は未来を拓く～」

（２）開催日　平成１８年（２００６年）１１月１７日（金）

（３）会　場　中野区立中野富士見中学校
中野区弥生町５－１１－１６　　電話０３（３３８１）７２７０

（４）主　催　東京都中学校美術教育研究会
会　長　　正留　久巳（日野市立平山中学校長）

（５）主　管　第３ブロック（中野・練馬・杉並）
各区中学校教育研究会　美術部会
実行委員長　　牧井　直文　（中野区立中野富士見中学校長）

（６）後　援　東京都教育委員会
東京都中学校長会
中野区・練馬区・杉並区教育委員会
中野区中学校長会・中野区ＰＴＡ連合会

（７）時　程

11:00 11:25 12:25 13:25 14:25 14:40 15:20 15:30 15:50 16:50 17:00

							全体会		
受付	実践発表（６０分）	休憩	研究授業（５０分）	休憩	研究協議（４０分）	休憩	開会（２０分）	講演（６０分）	閉会（１０分）

（８）実践発表　11：25 ～ 12：25　場所　体育館

①板金レリーフ『動物絵皿』
発表者　練馬区立大泉学園桜中学校　教諭
塗木　興一

②動物のイメージの守り神（埴輪）
発表者　杉 並 区 立 天 沼 中 学 校　教諭
青地　敏子

③心の目で描く
発表者　杉 並 区 立 井 草 中 学 校　教諭
山中　潤子

④「３１枚目の動植綵絵」伊藤若沖「動植綵絵」
発表者　アートエデュケーショナルプランナー　　山内　舞子

（９）研究授業　13：35 ～ 14：25

①「皮革レリーフ」デザイン画の鑑賞　　（場所～１年Ａ組　教室）

授業者　中野区立第三中学校　教諭　　大島　秀信

助言者　教育庁指導部　義務教育心身障害教育指導課

指導主事　　岩崎　治彦

②紙粘土を使った彫刻「自然物の模刻（着彩）」　　（場所～美術室）

授業者　中野区立第四中学校　教諭　　藤嶋　太一

助言者　町田市立木曽中学校校長　　篠原やよい

③自画像（デッサン）　　（場所～２年Ａ組　教室）

授業者　練馬区立石神井中学校　教諭　　三浦　秀樹

助言者　西東京市立田無第一中学校校長

北中美会長・都中美副会長　　大野　雅生

④螺鈿工芸の導入とアイデアスケッチ　　（場所～コンピューター室）

授業者　杉並区立神明中学校　教諭　　渋谷　里美

助言者　聖徳大学児童学科教授・女子美術大学客員教授

元文部科学省主任視学官　　遠藤　友麗

⑤ペーパークラフト～紙から生まれる想像の世界～　　（場所～３年Ａ組　教室）

授業者　練馬区立上石神井中学校　主幹　　黒田　一三

助言者　元稲城市立稲城第六中学校長　　森田　勝也

⑥「空想画」　　（場所～３年Ｂ組　教室）

授業者　中野区立中野富士見中学校　教諭　　志手　伸圭

助言者　元八王子市立長房中学校長　　入谷　　弘

（１０）全体会・講演　15：30 ～ 17：00

①開会の言葉

②主催者挨拶　　都中学校美術教育研究会会長　日野市立平山中学校長　　正留　久巳

③実行委員長挨拶　　大会実行委員長　中野区立中野富士見中学校長　　牧井　直文

④来賓祝辞　　中野区教育委員会教育長　　沼口　昌弘

⑤来賓紹介

⑥基調提案　　中野区立第三中学校　教諭　　大島　秀信

⑦講演　　「心と実生活を豊かにする美術教育へ」

聖徳大学児童学科教授・女子美術大学客員教授

元文部科学省主任視学官　　遠藤　友麗

⑧謝辞　　大会副実行委員長　中野区立中野富士見中学校副校長　　池田　浩二

⑨次回大会実行委員長挨拶　　板橋区立上板橋第一中学校長　　新保　邦明

⑩閉会の言葉

基調提案

中野区立第三中学校 教諭　大島　秀信

1　研究主題

『みんなの美術』
～感動と創造は未来を拓く～

2　研究主題の設定

今「生きる力」を育む多様な学力として「確かな学力」の定着が求められ、多くの学校で授業改善に向けた取り組みが進められている。美術科としても、こうした状況を今までの授業実践を見直す契機として捉え、「美術の授業を通して身に付けたい力は何か」という基本的な視点にたち返り、目指すべき美術の学力についてのコンセンサスを確立していく必要がある。そして、すべての生徒に美術科としての基礎・基本をしっかりと身に付けさせられるよう、授業の充実・改善に努めていかなければならない。

学習指導要領の美術の目標には「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的能力を伸ばし、豊かな情操を養う。」とあり、指導内容として「表現」と「鑑賞」の領域が示され、「表現」は「絵や彫刻など」「デザインや工芸など」の２つの分野にまとめて扱われている。

この、美術科の目標や内容を改めて踏まえ、「確かな学力」を見据えながら、どのように指導すれば生徒が将来にわたって美術を愛好する姿勢をもつようになるのか、ということについて考えた。

（1）基礎・基本の定着

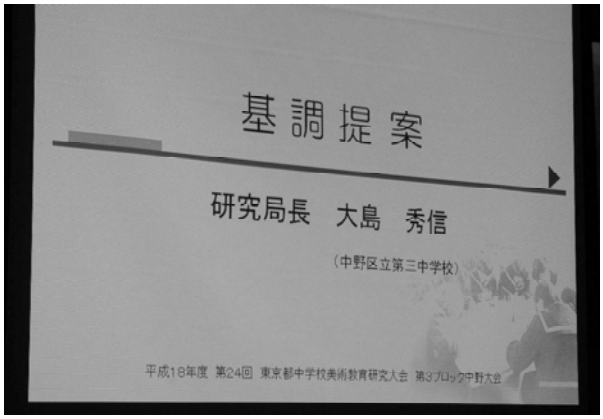
教科の基礎・基本を身に付けることは、生涯にわたって学び続けるための必要条件であり、自らの学びのスタートラインに立つことであるといってよい。美術科における基礎・基本の確実な定着は、美術という教科の根幹を成す必修教科の授業の充実によって成し遂げられる。今、そのための授業展開の工夫や指導法の改善が期待されている。

（2）すべての感覚を使った創造的な活動

生活体験の不足やテレビゲームに代表されるバーチャルリアリティーの問題に見られるように、今日の子どもを取り巻

く環境は心身の健全な発達にとって楽観視できないものとなっている。美術の授業では、生徒はそれぞれの実体験を基に作品を制作する。学校で学んだこと、生活の中で体験したこと等から作品が生まれてくる。材料の持つ様々な手触りを確認しながら制作することができ、しかも、知的に考え自分なりの形にまとめるという一連の学習は、美術以外の教科では成し難いものがある。すべての感覚を使い、創造的に活動することこそ、今最も求められていることではないかと考えられる。

（３）生涯にわたる活動



生涯にわたって美術を愛好する姿勢を身に付けさせるためには、題材設定の工夫や個を生かすきめ細やかな指導によって意欲を持たせ、制作の喜びを味わわせることが必要である。日頃の授業に対する一つ一つの工夫や改善により生徒の心に響く活動を実践し、美術の楽しさや幅広さに触れさせて、美術に親しむ心情や豊かな感性を育てていくことが求められる。

上記の３点を押さえたうえで、美術科における「確かな学力」とは何かを考えると、美術科の特色である「作品制作の過程での感動する心や想像する力の育成」「様々な美術文化を感動しながら鑑賞する力、鑑賞後に新たな想像力を使って再構築する力の育成」といったことがあげられるのではないか。これらの力がすべての生徒に備わることで、創造的な世界への理解が広がり、造形的なものの見方も育ってくると思われる。感動や創造を通して、生徒たちが将来にわたって美術を愛好することができるようになり、心豊かな生活を送れるようになるとの考えに立って、今大会の研究主題を「みんなの美術～感動と創造は未来を拓く～」と設定した。

３　研究主題への迫り方

教師は、授業の中で生徒と向き合うことで常に新たな課題を発見する。この研究では、それぞれの課題解決を目指した授業実践を取り上げ、美術科の指導内容のすべてに踏み込み、必修教科としての授業のねらいや構成の明確化に努めた。

「表現」の内容では、豊かに発想し構想する活動を工夫し、主体的に表現する能力の伸長や創造性を育む学習について考えた。また、「鑑賞」の内容では、作品のよさや美しさを味わう鑑賞力を高め、生涯教育としての鑑賞学習の在り方について探った。

未来の担い手である生徒たちすべてが、美術に親しみ、創造の喜びや、その価値について知り、人間らしい豊かな感性を育むことができるようにと願いつつ、今大会の研究主題に迫ることにした。

記念講演

演題　「心と実生活を豊かにする美術教育へ」
講師　聖徳大学教授・女子美術大学客員教授　　遠藤 友麗先生

都中美に来ると思い出すのは、３０代の頃に発表させてもらったことです。その時、現在いる聖徳大学の中瀬先生が、小松川の中学校の先生でした。同じように発表されました。その中瀬先生と、文部省を出て大学院でご一緒しています。

聖徳大学というのは、幼稚園、保育園、小学校の教員養成を中心にやっています。ですから、幼稚園、保育園、小学校の訪問へ学生が実習にいくので、授業を見ることがあります。聖徳大学では、生涯学習として、週１回２時間続きでスケッチを楽しむ講座をしています。最初は１４人くらいでしたが、だんだん増え４０人ぐらいになりました。

また、中学校の教師の時に、荒れた時代でしたからＰＴＡの人を集め、油絵教室をやっていました。その様子をＰＴＡに見てもらい、中学校の先生がいかに教育に一生懸命なのかを知らせました。幼児からおじいちゃんおばあちゃんまでの表現を発達を捉えて指導してきているわけです。３０代の頃に始めた油絵教室は３０年以上続いています。

もう一つ、７０歳以上の人を集めてスケッチの会を平成５年頃から、ある団体に頼まれて土曜日に月１回やっています。こうみると、美術のファンはたくさんいるのです。ファンというと変ですが、軽度の生活で心豊かに生きたい、あくせく仕事するだけでなく、ギスギスしているんじゃなくて何か心のゆとりを持ちたいという時には、美術の世界というのはすごくあるのです。

幼児に言葉を教えようとしても落ち着かなく動き回っているけど、絵を描くというと、何を描くかを先生が言わなくたってどんどんどんどん描いていってしまう。幼児の絵に取り組む活力はすごいですよ。幼児は物を見る力がすごくあります。本当にあった話ですが、幼稚園に行って幼児をまねしようという授業を学生にやったんです。「幼児がどんな心でどんな表現をするのか。」ある幼児が殿様バッタの絵を描いたんです。私は幼児よりうまく描いたのに、その幼児は「おじさんのはバッタじゃない。」と言うのです。なぜ幼児は「おじさんのはバッタじゃない。」と言ったのか。「足は６本あるぞ。」と言うと「おじさんの絵には“ピ”がない」人差し指を出して“ピ”がないというのです。“ピ”って何だと聞くと、「ぼくのは、バッタの足の先に“ピ”があるでしょ。」というのです。その時わかったのは、足の先についているのこぎりみたいなひっかかるものがついている。変な毛がついている。幼児ってすごいなーと思ったんです。確かにバッタには“ピ”という掴まるところがないと草に掴まることができないんです。草を食べたり草の汁を取ったりでき

ないんです。幼児は、バッタを捕ろうとした時にそこがひっかかって捕れなかったんじゃないのか。捕ったら自分の指にひっかかり、とてもインパクトが強かったんだろう。その幼児が言っていることは、私が描いたバッタよりも本質をついている。確かに、この足の先のギザギザがついてないバッタは生きていけないのです。人間は、幼児のうちは感じたままいろんな情報を得ます。知識を覚えると、だんだん感性に代わる知識が優先してしまうのです。そうすると、知識という目のクマができて、本当の感じ方で見えなくなってくる。

美術教育は、幼児の感性のように敏感に、ある意味うぶに考えさせる必要がある。幼児の知識に捕らわれない鋭い感性、実体験したところから感じ取る感性と、その後学んだ知識を融合させて本当のものが見えるんです。だから私は、「日本感性教育学会」を１０年前に作りました。私は、感性を感知融合という言い方をしています。感性だけをやっていても駄目、知性と融合して初めて本当のことがわかるんです。という論を作って発表しています。そして、中学校の学習指導要領に、平成１０年の改訂の時から「感性」という言葉を入れました。かっての学習指導要領に「感性」の項目は目標にあったのですが、途中からなくなっていました。美術科は「感性」だけじゃいけない「知」も必要です。感じ取ることと知的に理解することの融合を図っていくことが図画工作、美術の出来ることじゃないかと思っています。

別な面から言うと、図画工作美術教育は、「感覚」を言い過ぎる面がある。感覚の事は立ち入れないですよ、感覚のことは教育できない。自分がいいと思ったことを他人がダメだとは言えない。「感覚から感性に高めていく」のが大事な教育だと思います。「感性とは、良さや価値を感じ取る力」だと思います。感性と知性との融合が大切です。

鑑賞教育も感性から感じ取るだけでは、本当の鑑賞教育にはならない。見るだけで鑑賞になるのならテレビを見るだけで鑑賞になる。テレビは鑑賞ではない視聴です。見て感じれば鑑賞になる訳ではない。そこには「感知融合」、知的な面を知る事で、そうだったのかと分かる。私が文部省にいた時に、視聴覚教育の振興としてビデオ教材を作る指定製作映画といって、１年に１回各教科がビデオ教材を作ることができたのです。その時、“ピカソのゲル二カを味わう”を作りました。“デザイン行動”というのを作りました。全ての動物の中で人間だけがデザインする行動を持っている。幼児だってデザインするんです。ママの化粧を見て、ママがいない時に化粧台のところで化粧をしてみる。人間はデザイン行動を持っている。だから、幼児期からデザインを大切にするべきだ。ビジュアルコミュニケーションです。遊びじゃなく美しくなりたい欲求がある。中学になっても同じです。学校の標準服は、統一感のとれた清楚な美しさを求めている。美しさの中には、ゴテゴテした美しさもあるけど、清楚な美しさもあることを教えていかなくてはいけない。色々な価値観を教えていく必要がある。色々な価値観を教えていくこと、感じ取らせることで感性が豊かになっていくのです。

食育では、薄味から育てていくのですが、小さい時から即席ラーメンのような味の濃いものに慣れてしまっている。だから、私は「感覚情動の更新性」という言葉を使っています。“感覚や情動が高じてくる。”例えば、強い刺激に慣れてくると、強い刺激じゃないと感じなくなる。ラーメンは、普通のラーメンを食べても辛みのラーメンじゃないとおいしくなくなる。それが激辛になり、超激辛になる。カレーだってそうでしょ。子どもの時は、薄い味のカレーを食べさせられればいいんだけど、大人と同じカレーを食べていると辛い

カレーじゃなきゃ食べられなくなってきて、もっと辛いカレーを食べる。そうすると塩分の強いものになり、健康を害する。“感覚情動が高じてくる。”

いじめもそうです。私は、指導主事を道徳生徒指導で受験しました。学校時代は、校内暴力、いじめ、非行の対応で１６年間同じ学校で対応していました。ですからどちらかというと、美術よりも生徒指導の方が専門に近い、本もいろいろ書いています。美術よりも生徒指導の本の方が多いです。いじめについてもたくさん書かしてもらいました。やっぱり問題行動を起こすのも、基本的な生活習慣がきちんとできていないからです。できていれば起こさないはずです。不満が高じてくると問題行動が起こってくる。私は、美術は心の豊かさには非常に大事な教科だと実感しています。私は生徒指導をやってきた。それが美術という教科です。私にとってはとてもいい。また、美術の先生方で生活指導主任をやっている人が多いんです。美術の先生は、感性が鋭いので生徒指導に向いている。私は、生徒指導面でも結構呼ばれることが多いんですけど美術の先生が生徒指導をやってるという学校が結構多いんです。何故多いのかというと美術の先生は感性が非常にいいんじゃないのかな。いじめられている子どものことも分かるし、いじめている子が何か隠していそうだなと感じ取ることができるし。美術の先生の話し方は、感性を入れながら話をすることができる。理屈だけで攻めない。そういう面で美術の先生の良さはいっぱいあると思います。

絵を描くにしても、幼児が求めているものと、小学校の低学年が求めているもの、中学年、高学年、中学生、高校生が求めているもの、おじいちゃんおばあちゃんになって求めているものを見つめてみると、その発達が非常に良く分かる。うぬぼれみたいですけど、非常に良く分かる。私が今、聖徳大学でやっている生涯学習は、４０人以上います。朝９時から６階でやっています。おじいちゃんおばあちゃんも真冬でも階段を上がって６階まで絵を描く講座に来てくれます。愛好者はたくさんいます。多くの人が美術教育を心配していると思います。心配はいらない。少なくとも手は打ってきたという自負があります。

文化芸術振興法だって、ほっといて湧いて出るものではないですね。ある形があってだんだん出て来たものです。あの中に付帯決議で小・中学校における芸術教科の時間が削減されていることをかんがみ、児童期の芸術教育の充実に配慮することと書かれています。児童期というのは法律上は１７歳まで児童です。だから、付帯決議で配慮せよと書いてあるからなくなることはないです。制度が変わるとわからないですけど。

今回、ベネッセの研究所の調査で、どの教科が大事かというので美術が一番低かった。３割しかなかったということが発表されました。でも私の中での経験からすると、平成１０年の改訂の前に平成８年にもこういう調査をやった。その時には、美術教育が必要だという人は２割しかいなかった。今回は１割増えている。３割しかないけど１割増えている。増えているということは、先生方が努力されていると思いますよ。答えているのは、保護者ですから､保護者は必要かどうかを自分の幼少時代を振り返って必要かどうか考えます。今の保護者たちが小学生、中学生だった頃の美術教育は、その前より変わってきたと言えるのです。だから、今の子どもたちが大人になった時には、もっと美術教育が大事だと答えてくれるのではないかなと思います。そういう点で、私は全国いろいろな所に呼ばれても、「悲観しなくていい“ライジング・サンだ。太陽はまた昇る。”」と言っています。だ

からいい教育をしてください。悲観的な教育をしては駄目だ。美術教育がなくなることはありませんとはっきり言いたい。だけど、高等学校の履修に受験に関係ないからという理由でなくなるのは心配です。実際美術をやらない学校が大変多いということを聞きました。美術の教員採用をしない学校も大変多いと聞きました。これは、多分ある時期的なものじゃないのか。今回のことで、学力中心になることは是正されると思います。私は、前から学力から能力へと言っています。学力なんて学校の時代しか言わないことです。美術の学力だろうとなんだろうと。国語の学力、受験する時の学力。会社に勤めたら、「あいつは学力の高いやつだ。」などと言われないでしょ。「あいつは能力がある。」「大学出たのにこんな事も知らないのか。」とか言われる。能力を問われる。能力というのは、自分で考えて判断し、実行する力ですから。学力とは、どれだけ覚えたか。計算がどれだけできるかです。だけど企業に勤めたら、そんなことは計算機を使えば出来る。大事なことは、それを使ってどれだけ課題解決できるか。もっと良くなる方法を考える。そういう思考力を能力というのです。能力というのは、優れた力、できる力です。だから私は、“学力から能力へ”と言っています。今の学力論争は、そんなふうに行き着くところがあるのです。

授業には、基礎学力が必要ですよ。常識も知らないというのが今多くなってきています。基礎学力は必要だけど、それ以上は能力です。能力というのは知識や経験を基に、自分で考え、自分で判断し、自分で答えを出していくのが能力です。そういう点では、図画工作美術は能力の育成なんです。能力が十分に発揮できる、あるいは能力がどんどん広がっていくようにする為には基礎学力、基礎的な知識や技術を持たなくてはいけない。技術なんかいらないという人もいます。でも技術を持たなくては、何の解決もできない。その年代毎に、こういうふうに描きたいと言った時、こうすればできるよ。ああすればできるよ。と技術は基本的に教えてやる。教えて出来ることは教えてやる。その筋道を考えるのが美術教育です。もし、何にも教えないで自分で自由にやれと言ったらほとんどの子が出来ないまま終わってしまう。学生で美術が苦手な人が８割から９割います。絵が描けないと言う。絵を描くのは基礎的なことを教えてやればできるのです。そこから先どうやってやるかが一人一人の能力です。教われば、その先の世界が見えてくる。教わらなければ、その先の世界が見えてこない。だから発達に応じて、出来ることはきちんと教えてやる。そして、わたしは『まずさせて、おだてて、誉めて、その気にさせて、しっかり教えて伸ばします。』これは、幼児だって大人だって同じなんです。美術のいいのは、部分を誉められる。「この色いいんじゃないの。」「この線いいじゃないの。」と算数では１＋１＝２じゃない答えをだしたら、「おもしろいこと考えたね。」と言えない。でも美術はある部分だけでも誉められる。「おだてて、誉めて、その気にさせる。」その気になった時にしっかり教える。「はい皆さん、こうやってみましょう。」「どこを教わりたいの？」というふうに。『ま

ずさせて、おだてて、誉めて、その気にさせて、しっかり教えて伸ばします。』そのプログラムが組まれていれば、子どもは生き生きとやると思います。させるだけで終わってしまう。させっぱなしで終わってしまったら、やったけどできなかったということがおきます。

国立付属中学校で、中学１年生の半ばごろに「美術は楽しいか？美術は学ぶ意味があるか？」と聞いたら６７％が「勉強しなくていい、美術はなくていい。」と答えた。その理由は、「描けないとかできないとか、勉強してもできるようにならない。」と答えた。今の社会はビジュアル社会です。テレビでも広告でもすべての情報は、色と形の情報なのです。美術の情報なわけです。実生活で生きるということは、色と形で人に説明できる能力、色と形で人に説明出来る能力が絵の能力になる。絵というと芸術的な絵を描くだけではなく、写真も絵の情報です。文字よりも絵の方が情報としてはインパクトがある。こういう描き方が出来るということを広めることも大事です。自分のテーマを形や色の働きを意識することで人に伝えることができる。つまり、形や色を工夫して人に伝えるという価値観でこの１年生を指導したら、１年後にはアンケートで９４％の子どもが美術を楽しいと答えた。美術を勉強する価値があるかという調査では、入学時には３３％の子どもしか美術を勉強する価値があると答えなかったのが、１年後は９５％が美術を勉強する価値があると答えたのです。

言葉に置き換えても同じです。言葉を覚えると大人になったような気がする。言葉を覚えるといろいろな人と話ができる。いろんな本を読むといろんなことが分かるようになる。本を読むと美しい表現が分かるようになる。別な表現の仕方も分かるようになる。美術では、いっぱい情報を感じ取らないと、心の中に情報がたまらない。絵を描こうとしても、造形しようとしても心の中に情報がいっぱい入っていれば豊かな表現ができる。 鑑賞することによって、情報がいっぱい入る。鑑賞イコール世界の名画とは限りません。幼児期の子どもに絵本を読み聞かせるのも鑑賞です。絵本を見るのも鑑賞です。国語で読書を大切にするのは何故かというと、他者の書いた物から情報をいっぱい貰える。他者の豊かな心をいっぱい貰える。美術の鑑賞は、国語の読書と同じだと思います。それなのに中学校の鑑賞の時間が年間３５時間の内２時間しかないという実態があります。学習指導要領には３５時間の５分の１は鑑賞をやるように書いてある。７時間はやってくれと言います。表現ばっかりやっていたら、人間は豊かになることはできない。表現力を豊かにしたかったら、人の表現を勉強しなければいけない。人の表現を勉強することでヒントを得たら、自分の表現も豊かになるんだ。だから、鑑賞をいっぱいやって、小学生に幼児の時の絵を見せてくれ、そしたら、「僕も小さい時こんな絵描いたっけな。」と幼児期を思い出し、「幼児に帰って絵を描いて見よう。」と言ったら幼心をもった現在の心豊かな絵が出来る。

美術はこれから大事になっていきます。企業に勤めたら、ビジュアル能力がない人は会社で勤まらない時代です。文章だけでは、誰も見てくれない時代です。美術の先生がマンガが描けない。イラストレーションが描けない。アニメーションが作れないのを知っています。大変失礼な言い方ですけど。美術は、その子どもが将来社会人になった時に必要な能力を身につけるためにやっているのです。先生が出来なかったら、専門家を非常勤で呼んでやってもらえばいい。これからは、小学校だってマンガを描かせてほしい。ピカソは教科書の隅にマンガを描いているのです。嫌な先生の顔を描いている。私も子供時代にや

りました。小学校の時はパラパラアニメでいい。それが中学校になったらビデオを使って勉強する。企業に入れば、自分の会社の製品を売るのに短いアニメを作ることができる。ビジュアルコミュニケーションで仕事が出来る。そこで学習指導要領を見ていただければ大変ありがたいと思います。実生活に生きるということを大事にしていく必要があると思います。

やはり義務教育というのは、中学校卒業したら、美術はやらなくていいんです。義務教育までしか美術はないんだと思って先生方指導して欲しい。美術教育で９年間しか勉強しなくても、社会人になった時にそれが能力として発揮出来る。美しさが感じとれる感性をちゃんと育てて欲しい。９年間の内に、幼児教育を含めるともっとになりますが、大人になっても豊かな感性がある、ビジュアルで説明できる能力がある。絵を描いたり頭の中でしかないものを創り出すことの出来る。美術の凄いところは、頭の中にしかないものを具体的に創り出すことが出来るところです。写真はないものは写らない。人間の頭の中にあるものは、絵だとか立体物にいくらでも描けるんです。発砲スチロールを切ったり削ったり積み上げるとある形が出来る。石っころを積み上げるとある形が出来る。それを絵に描くといろんな形の絵が出来る。高校で音楽や書道をとる子が大半いるんだということを考えて、９カ年で社会人になった時に必要な能力が身に付いているか。というだけの責任感を持って指導したいと思うんです。単なる面白いとか楽しいだけで終わっちゃいけない。確かな能力としても身に付く。その確かな能力を楽しく身につけさせるのが教師の指導力です。教師の指導力とは、確かに身につけさせるのを楽しく面白く身につけさせる力です。そして、面白かった、そして力が付いたというのが美術教育です。そういう美術教育をすれば、美術教育はいらないという人はいなくなるんじゃないでしょうか。

幼稚園、小学校、中学校の１２年ぐらいで育てる能力を見ていきましょう。中学校は中学校だけでやらないで、小学校高学年ぐらいとドッキングしながら、子どもにとってはスムーズに山の頂点に登れるようにしていきましょう。そのためには、皆さんが中学校の先生だけれども小学校へも行って勉強する。小学校の先生にも中学校に来て見てもらう。そうして共通のカリキュラムを作っていくということが大事だろうと思います。学習指導要領の改訂の中心も今回そこだと思います。９カ年一貫した学習指導要領、さらに幼児期の造形教育も含めて十数年間の美術的な能力の発達、そして、感性情操が一番大事ですよ。

もう一回、本当に感性情操を育てて来たか。美しいものに気づかせる教育、いいものを見て教える教育、気づいたことを発表し合ってみんなで共有し合う場を作らなくてはいけないのです。一人が気づいたことをみんなの気づきに広げていく。そういう教育というのは大事だと思います。

“ライジング・サンです。”太陽は必ず昇ります。美術教育が悪くなることはありません。大いに自信を持って、大いに頑張ってやっていきましょう。終わります。

研究授業・研究協議

研究授業１	学校名		中野区立第三中学校	授業者	大島　秀信
テーマ	みんなの美術　～感動と創造は未来を拓く～				
領域	Ｂ鑑賞	題材	「皮革レリーフ」デザイン画の鑑賞		

＜１＞題材設定の理由

美術の鑑賞という学習は、作品を見る・知るということを通して、ものの見方・感じ方を高めていく重要な活動である。しかし、授業の中では、制作・表現活動に比べ、生徒作品や芸術作品の鑑賞等に当てる時間は少ない。

そこで、表現活動の途中に生徒相互の作品鑑賞を取り入れ、その生徒の考えを読み取る時間を計画した。その中で自分自身を振り返り、思考を広げ、感じたことを表現する力を育てられるのではないかと考え､主体的に鑑賞活動に取り組む題材として設定した。

＜２＞指導目標

生徒それぞれの作品の良さや美しさ、多様な表現方法等についての理解を深め、その制作意図や表現の工夫に生徒みんなで共感し、自分自身の作品について振り返る。

＜３＞授業者自評

生徒にとって、他の作品を見ることは非常に興味深く、発表者のデザイン画を注目し、その発表内容は生徒相互に良いアドバイスや参考になったようである。また、発表し、互いの作品の良い点を見合うことで、「自分の作品に自信が持てた」という生徒もいた。

ただ、今回の授業のように、表現活動の途中に作品相互の鑑賞のためだけの授業を行うことは、年間計画を立てる際にも非常に難しく、どのような方法が良いのか、どの題材で行うことがより効果的なのかを十分に検討しなければならない。

しかし、今後も生徒相互のコミュニケーション活動を取り入れた場面を設定し、主体的に鑑賞活動にとり組む題材を考えていきたいと思う。

＜４＞質疑応答

Ｑ：表現をしながらの鑑賞ということで、制作の過程であえて鑑賞をとる意味を教えてください。

Ａ：在任校では、１年の２学期に木彫パズルを製作しています。できる子は、参考作品を見れば、自分で組み合わせたり図鑑を見て描くことができますが、苦手な生徒は、図鑑をみても描けない、発想が出てこない、制作が止まってしまうことがあります。

そんな時、他の生徒の制作中の作品を見せると食い入るように見ていました。そこで、クラスの中で自分が考えてたアイデアや工夫したことを発表し、互いにアドバイスしました。デザインが決まっていない生徒へのアピールという意味もあり、制作の過程で自分を振り返り、次のステップにつなげる、ということで取り組んでいます。

２年次、３年次になると１年生からの積み重ねもあるので、発表の時間も短くなってより効果的に行うことができるようになってきます。１時間、２時間鑑賞の時間をとれない場合は、制作前に１０分１５分で行うこともあります。

Ｑ：発表は、デザインができていない生徒も全員するのですか？

Ａ：全員します。アイデアが途中の生徒は、現時点で自分の悩んでいることを発表します。それに対し、クラスメートがアドバイスをする。批判的なムードではできない授業なので、普段からの授業の雰囲気作りが大切になってきます。悩んでいる生徒には、教師が一言いうよりも、クラスメートからの意見が大きな影響力を持つこともあります。

＜５＞ご意見・ご感想

＊中野富士見中は生徒数が少なく、こじんまりしていて発表していても生徒がよく見るし、集中していました。授業者が「あなたは、野球部なの？」などの声かけが見られ、授業者の声や語り掛けが穏やかで、教師の資質として大切なことだな、と改めて感じました。

＊今日初めて会った生徒で授業をしているという雰囲気がまったくなく、授業者の暖かさを生徒も感じていた。授業者が生徒の普段の様子をもっと分かっていれば、もっと沢山のコメントを生徒にすることができたと思いました。友達の作品を見て意見を聞いて、気がつくことがたくさんある、自分自身を振り返る、ということで道徳の授業の要素も感じました。

＜６＞ご助言　　教育庁指導部　義務教育心身障害教育指導課指導主事
岩崎　治彦先生

年間３５時間という大変短い授業数の中で大切になってくるのが「一時間の授業の密度」です。今回の研究授業で鑑賞の能力がはたして育まれたのか、表現の活動に生かされたのか、疑問が残る人が多くいたと思います。大島先生は、在任校の中野三中で１年生から３年生までカリキュラムの中でいいタイミングでこの実践し、学習活動の中で効果的に活用されていることを、まず大会紀要の中に盛り込む必要があったと思います。そういう意味では見ている人に誤解を招きかねない授業だったと思います。

図工・美術でしか学ぶことができない学力があるから義務教育の中にあるわけです。学校教育について問題になっている中、美術の学力を気にしている保護者は、ほとんどいません。問題になっていないことこそが問題であり、図工･美術の大切さを伝えるのは、現場の教師以外いません。ただ感覚的に楽しいだけではなく、自分の中の能力が発揮され、自己実現感、成就感を得られる場面を多く作ることが大切です。授業の質の向上、授業の密度を上げていく努力を現場の先生方にお願いします。

研究授業２	学校名		中野区立第四中学校	授業者	藤嶋　太一
テーマ	みんなの美術　～感動と創造は未来を拓く～				
領域	彫刻	題材	紙粘土を使った彫刻「自然物の模刻（着彩）」		

＜１＞題材設定の理由

第一学年では生徒全員が理屈抜きに楽しく取り組めて、個々の達成感を味わうことのできる題材を探した。自然物の模刻は石ころや木の枝をモデル（題材）に、それをそっくりに作るというものである。この課題を経験することでモデルをじっくり観察したり、そっくりに作るために様々な道具を工夫して使うといった美術の基礎的能力を身につけさせたい。指導要領との関連としては「２内容」にある「（１）自然や身近なものを観察し、形や色彩の特徴や美しさなどをとらえスケッチをすること。」を立体で行うものである。

＜２＞指導目標

・モデルと作品とを絶えず比較しながらモデルの本質（自分が感じとったモデルの特徴）に迫ろうとする態度を養い、引き出す。
・意図に応じた材料や用具の生かし方などの基礎的技能を身に付ける。
・自然物の美しさに気付き、意識するとともに、他人の視点に共感する心を養い想像する力を伸ばす。

＜３＞授業者自評

私はこの題材を通して生徒に「見て描く」「見て作る」という事を身につけさせたいと考えた。「身につける」という言葉のとおり意識をせずに自然とその行動が出るように。また、限られた時間の中で、できるだけ多くの生徒に「できた！」という達成感を持たせ、次のステップに進ませたい。そのような思いで題材を模索していたときに石と紙粘土という素材に出会った。石をモデルに選んだのは、同じ自然物でも野菜や果物では週に１時間ちょっとの授業では腐ってしまったり、形を保つのが難しいためだ。紙粘土でも多くの種類があり、軽いものから重いものまである。軽くて手につかない粘土を使うと、見た目と重さにギャップがあって面白みが出てくる。しかし石のゴツゴツした感じを出す細工が少し難しい。オーソドックスな紙粘土を使うと重みも本物と間違えるほどの作品が出来るが、作業中に汚れやすく片付けに手間がかかるという不便さがある。制作中には黙って粘土と格闘し、モデルを見つめる生徒の姿を目にすることができた。

モデルと作品を並べて絶えず見比べる事や、前後左右上下と6面から観察する事を教える事で観察の方法が広がった。このように立体物を立体でスケッチをしたり、色をそっくりに作ったり、紙にスケッチをしたりと様々な活動をとおして生徒に「見てつくりだす」態度が身につくことを期待している。

＜４＞質疑応答

Ｑ：今回の授業では制作の過程でしたが、「鑑賞し合う」に授業ではどのようにしていますか。また、生徒から出てきた言葉にはどのようなものがありましたか。

Ａ：「人から認められる経験をしてもらいたい」ということから、どの作品がよかったかを投票してもらい、よかった生徒にシールをつけていくなどして、いろいろな生徒にシールがたまるような工夫をしています。生徒から出てきた言葉としては、自分がいかに苦労して本物らしく作れたか、自分と比較して他の人はどうやって作ったのかといったものや、「うまい」「へた」という言葉も出てきます。中学１年生の段階ではボキャブラリーが少ないので、言葉としては出づらいです。

Ｑ：「自然物をつくる」授業では、野菜や果物など生ものは次の週まで保存できないという問題がありますが、どのようにしていますか。

Ａ：ピーマンは冷蔵庫で３週間もちます。また、１年生では２時間続きでやると良いと思います。

Ｑ：今回の授業では、なぜ「石」を選んだのですか。また、年度の種類はどのようなものを選んだのですか。

Ａ：他にも自分で「カボチャ」なども作ってみましたが、「石」をつくった時に自分でもおもしろかったし、スパッタリングを使った時の喜びを生徒にも味わわせたかったからです。また、身近である「石」を作らせることで、大人になってそれを見たときにも楽しめるという意外性を「石」に感じたということも理由です。

粘土については、軽い紙粘土を使いました。手にしたときに「あれ？」という驚きがありました。去年はオーソドックスな重い粘土を使いましたが、石と同じくらいの重さでこれはこれでおもしろいと思います。軽い粘土は、細かい造形が作りにくく、重い粘土は手に付いたり、汚れやすいという欠点がありますが、それぞれにおもしろみがあると思います。

＜５＞ご意見・ご感想

＊昔と違って、週に１時間の授業では年間にいくつも作品をつくることができません。彫刻だけの要素ではなく、工芸的要素、デザイン的要素、絵画的要素など複合的な要素でつくらせる時代になったなと思います。今回の授業は、立体作品をつくる楽しみを味わわせる授業であったと思います。絵画的要素もあり、スパッタリングというテ

クニックもあり、生徒の興味を引きつけるすばらしい授業だったと思います。

＊今回の授業は、彫刻、塑造だけではくくりえない様々な要素があったと思います。一つ一つの工程で目的を明確にする必要性を感じました。

＜６＞ご助言　　町田市立木曽中学校校長　　篠原やよい先生

生徒の様子から題材設定の良さが伝わってきました。１年生の題材設定をするときの理由として、生徒が楽しく取り組め、達成感を味わわせたいということがあります。これには、二つの視点があります。一つは子どもの発達段階の問題であり、もう一つは先生の実感であると思います。

中学１年生の発達段階では、小学校の概念的な表現から写実性を求めてくる段階になってきます。表現の欲求が出てきたとき、その表現を可能にするテクニックを与えてあげたり、それを満たせる題材を設定することが必要だと思います。「こうすればそっくりになるよ」という先生の言葉が生徒の喜びになり、「できた」という結果が出てくるところに今回の題材設定の良さがありました。２年、３年になっても、それぞれの発達に合わせた題材設定が必要だと思います。

もう一つは先生の実感が大切だということです。自分の経験も含め、子どもたちがどのような子どもたちか、世の中が何を求めているのか、などたくさんの事から実感が生み出されていきます。世の中にはたくさんの情報があふれています。美術教育に関連した多くの情報から、これはおもしろいという実感を働かせて磨かれていかなければなりません。芸術、美術から遠く隔たった生活をしていては、実感はあり得ません。子どもたちをよく観察したり、世の中の動きをよくみる必要があります。私たちは世の中に身をおいて、いろいろなものに注目して、自分の実感を磨くということが大切です。自分の制作活動を続けたり、教育分野の中の研究を深めていくなど磨く方法は人それぞれだと思いますが、自分の実感を磨いてほしいと思います。

新指導要領の美術教育で育てるべき基礎的能力で強調されているのは､「観察の力」「基礎的技能」です。私たち指導者はそのことを考え、きちんと教える責任があります。今回の研究授業は、それをしっかりと捉えた授業でした。

また、美術は色や形を表現するので、言語表現から逃げてしまいがちになりますが、言語化することから逃げてはいけないと思います。自分に対する思いや他者に対する思いなど、おりおりに言語化していく方が学校教育としては効果的であると思います。どういう意図で制作したのか、制作してどう思ったのかなどを言語化した方が物事を深めやすくなると思います。

今後の美術においては、「絵画」「彫刻」「デザイン」「工芸」の分野を分けて扱うのではなく、題材を一体化して扱うことを避けられません。そして、その題材のねらいを明確にしていくことが必要だと思います。

研究授業３	学校名	練馬区立石神井中学校	授業者	三浦　秀樹
テーマ	みんなの美術　～感動と創造は未来を拓く～			
領域	絵画	題材	自画像（デッサン）	

＜１＞題材設定の理由

美術教育において、生徒の個性を伸ばし、自信を持たせ、生き生きと自らを表現できる力を育成することは重要な課題の一つです。個性的な表現をし易い環境を整え、工夫することの楽しさ、喜びを体験させることからそうした力を育成することができると考えます。

本題材では生徒自身の最も気に入った写真をモチーフとします。思い出が詰まった写真からその頃の自分を思い出し、想像することにより柔軟な発想を促し意欲を喚起させる。服装、髪型、表情、ポーズそして色彩も自由とし、また自分の将来の姿を描いてもよいとする。自由に表現方法を判断する機会を増やすことで、自ら考え工夫し、表現する姿勢を育て、自分らしい表現をすることによってのみ味わうことができる達成感・自己肯定感を体感させることを大きなねらいとします。そこから発展させ、自らがかけがえのない存在であることの理解を深めさせていきます。

「自らがかけがえのない存在である」との認識は自分自身に自信をもたせます。そうすることにより自己の個性は普遍的で尊重されるべきものであること、個性を表現することはごく自然なことであることを理解させます。それが、個性的な表現力の育成に繋がると考え、「自画像」を題材と設定します。

＜２＞指導目標

・鑑賞会において、お互いに認め合うことにより制作意欲を喚起する。
・基本的な表現方法の確認により、学習内容の定着を図る。
・工夫することが個性的な表現であることに気づかせる。
・個性的な表現への意欲が能力の向上に繋がることに気づかせる。

＜３＞授業者自評

＜題材と学習活動＞

「自画像」は、生徒にとって恥ずかしさから作業が進まない題材であるが、モチーフとして思い出が詰まった写真を使用したことにより、スムーズに制作に入ることが可能となった。写真の使用は、目線を気にせず、画用紙に正確に線を描くことに集中できることもあり、作業効率、仕上がりの面で、成果をあげることができた。

班ごとに実施した鑑賞会は「頑張ったところを見つけよう。」との投げかけにより、

ワークシートへの記入が容易になった。「みんなが絵の良いところを認めてくれたのが嬉しい」、絵を提示した生徒の感想である。意欲を喚起する、クラス全体の雰囲気作りと言う点でお互いを認め合うという目的の鑑賞会は有用であるといえる。

デッサンの実践においては、前時に実施した基礎練習により、自信を持って描く生徒が数多く見られた。反復練習は技術の習得のため、効果的な方法であると考えられる。また、「最後の授業であり、時間内に完成させよう」との投げかけを導入時に行ったことから、高い集中が生まれ、作品制作に好影響をもたらすことができた。教師の授業力の中で、生徒の意欲を喚起する言葉、それを伝える教師自身の強い気持ちの大切さを再確認することができた。

個性的な表現の実践・理解においては､板書による説明からの意識付けにとどまった。自らの個性の大切さの理解、他者の個性を尊重するする姿勢の育成は継続して指導することにより育まれる今後の重要な課題である。

＜評価と支援＞

本制作における授業者の最も重要な支援は、意欲が形となって表すことのできない生徒に対する指導である。個性的な表現・工夫による達成感を得る前に作品制作自体への意欲をなくす可能性があると考えるからである。教師自身の実演を含め、粘り強い指導を心がけた。

評価においては、仕上がりの良い作品はもちろんであるが、多くの箇所で工夫のみれる生徒、意欲的な取り組みがみられた生徒は評価しなければならない。教師のきめ細かく幅広い評価は生徒は今後の制作意欲を高めるはずである。また美術を愛好する精神は達成感・充実感から得られる楽しさからなると考えるならば、努力する姿勢を評価することはきわめて重要である。

＜４＞質疑応答

Ｑ：本日の授業は鏡を使っていないのはどうしてでしょうか？鏡を使って自画像の授業を行うと、自分の顔を描くことを恥ずかしがってしまうことが制作の壁になっています。

Ａ：写真を写真と割り切って、正確に描くことで自分の思い描く線を描ければよいというねらいで使用しています。

Ｑ：柔軟な発想の授業だと思いました。同じような色彩、ポーズが多かった点と、導入のねらいがどの程度生徒に入ったか、お聞きしたいです。

Ａ：最初、３時間授業の予定が２時間に変更になり、完成を優先させることにして見本を見せて指導しました。評価を前提としているため色使いなどの点でオーソドックスな指導なった点は反省です。顔の色彩は比較的同じですが、普通　黒を使う部分に青や赤などを自分で考えて色彩を使用することができたと思います。

Ｑ：色鉛筆を使用することで、色彩が自由に表現されていると思います。バックの仕上げなどはどのようにするのでしょうか？

Ａ：絵の具に比べ色鉛筆はうまく描け、自信を持つことができます。バックは自分で資

料を用意し星空にするなど工夫し自由な表現に任せています。

Q：鏡を見て描くことは子ども達にとって抵抗があると思いますが、だからこそ逆に鏡を見せて描くことで内面を考えさせることができるのではないかと思います。完成した後の生徒の授業の感想などを聞かせてください。

A：自分との対話という点では、生徒はこの課題が大好きです。写真という題材は、意欲をかき立てるようで、描かせていると、熱心に、すこしづつ自分をかっこよく描いたり、飾り立てたりもしています。

感想としては、絵の具では描けないが、色鉛筆ではうまく描けると言っています。自信を持たせる意味で色鉛筆の使用もよいと思います。また、作品を展示し他の作品を見て誉めあっていることもよいことだと思います。生徒たちも満足する題材と思います。

＜５＞ご意見・ご感想

＊短時間で完成させる制約があったが、作品は、ヘンリームーアのデッサンを思わせるものがありました。将来子ども達に描画の力がつくと思いました。

＊この年代の子どもは自意識から鏡を見られないと思いますが、自分の中で自分のイメージはあると思います。写真を使ってうまく描けると言うことは自信になると思いました。自分を描くことで膨大な自分のイメージと対話ができている点がすばらしいと思います。

＜６＞ご助言　　西東京市田無第一中学校校長　大野雅生先生

展示してある作品を見て、印象として強い絵だと思いました。マンガ・イラストに見えるところもあるが、子どもたちが絵にのめり込んでいる、集中している作品であると思います。この作業をさせる上で、導入が難しいと思いましたが、自評を聞いていて、スタートから気に入った写真を使うことが、ポイントかと思いました。

美術は、生きる力を育てる教科であり、いろいろなときに関わっている授業です。

この授業の良いところは、うまく描こうというより、自分を表現しようとする意欲を育てる点、また生徒が自分の作品に愛着をもっている点にあります。

導入時に、自分の一番思い出にのこる写真を用いていますが、途中から変身願望に変わっている。どうやって自分を変身させるか、その方向に意欲が向いてきて、変化させることに楽しみを見出し、それぞれの心も表現できていた。

制作時に、勇気を持って色を塗るように指示し、生徒の意欲をかき立て、周りを気にさせずテンポよく授業を進めていた。３時間の設定でも充実した３時間の授業になったと思います。

他の人の作品をほめること、また、自分の作品もほめられることも美術を好きになるステップになると思う。この授業は美術を好きになるインパクトのある授業となりました。生徒たちが思い切ってチャレンジできる内容であり、これから完成するであろう作品を見たいと思いました。

研究授業４	学校名	杉並区立神明中学校	授業者	渋谷　里美
テーマ	みんなの美術　～感動と創造は未来を拓く～			
領域	デザイン・工芸	題材	螺鈿工芸の導入とアイデアスケッチ	

＜１＞題材設定の理由

最近の生徒は、日本人でありながら日本の文化遺産や伝統工芸品に触れることは少ない。また、地域的に伝統工芸品のない場所に住んでいればさらに関心も低い。そこで、いくつかの螺鈿の作品鑑賞を行い、奈良時代に唐から伝えられて発達した手法を学び、その製作を通して、日本の文化遺産を大切にする気持ちを育てたいと考えた。

＜２＞指導目標

・用途や材料を基に、機能性と美しさのバランスがとれたデザインの構想をねること。
・制作の順序や方法などを考え、計画を立てること。
・材料や用具の特性を生かし、今の時代を表現すること。

＜３＞授業者自評

授業時数の少ない美術科にとって、コンピューターを活用した授業には大きな利点があると考える。第一に、鑑賞や作品製作のための資料が、一つのキーワードを入れることで、わずかな時間で検索結果として出てくることである。第二に、見つけた資料をコンピューターでプリントアウトすれば写真のようにきれいに出るので、イメージを膨らませるためにとても有効である。アイデアスケッチの段階で、コンピューターを利用することによって発想の広がりも無限になってくる。

しかし、コンピューターは安易に活用できる分だけ著作権の問題には十分配慮しなくてはならない。生徒の力量によっては真似て描くことで精一杯になってしまうこともある。さらに、資料が無限にあるため、教師のチェックも困難を極めてしまう。充分にメリット、デメリットを理解した上で、色々な情報を上手に活用しデザインに結びつけられれば、情報ツールとしての活用が有効になると考えられる。

授業を行ったクラスは美術の授業としてコンピューターを初めて活用し、螺鈿そのものにも馴染みがなかったため多くの戸惑いがあった。しかし、生徒がコンピューターにより情報を最大限に活用したことで、自分なりのイメージを膨らませることができたと思う。一方、コンピューターによるペイントが使いこなせた生徒は色の組み合わせや、

完成作品の全体像をつかみながら効果的に作業ができたが、使いこなせない生徒はかえって時間がかかってしまう結果になってしまった。

今回行ったコンピューターを活用した授業の形態が新しい課題作成の動機づけになり、情報ツールを身近に感じて作品製作のアイデア段階で活用できれば良いと考えた。まだまだ開発段階であるが、ネットワークを繋げれば、美術館や制作者の作品を直接見たり、作者の意図を理解したりすることも出来るようになり、より作品を身近に感じることが出来るようになると、さらに有効な活用が図れると思う。

題材選びに対しても日本を知ること、伝統工芸を知ること、匠の技を知ることを念頭に置き設定したが、普段の生活では知り得ないようなことを、授業の中で学びながら自分なりに広げていくことができれば良いと思う。次世代を担う生徒達の中に伝統文化を大切に思う心や、それを継承していく役割を担う気概を育てるために、美術の授業がその入り口となっていけばいいのではないかと考える。

＜４＞質疑応答

Ｑ：導入をどのように展開したのですか。

Ａ：まず、螺鈿という言葉で検索させ作品を見させた後、有名な作品を紹介しさらに観たかったら自分で調べてみなさいということでホワイトボードにキーワードを書きました。最終的に日本の伝統模様というキーワードを提示して、そこからそれに近いものは自由に選んでもらいました。

Ｑ：螺鈿と日本の伝統模様というのを伝えただけですか。

Ａ：あとは五弦琵琶やなどの作品を教材提示装置により提示し、参考作品を探してもいいという話をしました。それらの作品は高度なので、難しいと思った生徒は伝統模様に少しランクを落とし、描きやすく見やすいといったものに変えていくといった感じでやります。

Ｑ：神明中でやるときは何年生ですか。

Ａ：３年生です。３年生になるとパソコンが大分できるので、３年生には実際に描かせます。

Ｑ：アイデアスケッチはみんなパソコンでやるのですか。

Ａ：マウスの扱いが難しい子は手描きで構わないとし、今日ほど細かく色画用紙や色鉛筆は配りません。

Ｑ：パソコンを使うのと手描きの違いは何ですか。

Ａ：パソコンだと色のイメージがわきやすいのでコントラストの調整等がしやすいです。細かい繊細な作業は手描きの方がいいけれど螺鈿は切るのが難しいので、パソコンでやれる範囲位が丁度いいです。

＜５＞ご意見・ご感想

＊パソコンを使っての下書きにとても興味がありましたが、立ち上がりから生徒がひきこまれるのが分かりました。パソコン、参考にさせていただきたいと思います。

＊教材提示装置、授業で取り入れさせていただきたいです。

＊難しい言葉を子どもたちに検索させるのがいいと思いました。

＜６＞ご助言　　聖徳大学児童学科教授　女子美術大学客員教授

元文部科学省主任視学官　　遠藤 友麗先生

螺鈿は今ほとんどありません。美術はとかく新しいもの新しいものと考えがちです。温故知新という言葉がありますが、新しいものを考える上では古きものを大切にしなければなりません。その点では鑑賞がすごく大切です。鑑賞をしっかりやっておかないと螺鈿の箱や模様を作るときに苦しむことになります。また、子どもにとって初めてのものや経験は古いものでも新しいという点が大切です。

螺鈿はただの箱をどうしたら美しく見せられるかという考えから生まれ、中国から伝わったものですが螺鈿の基はただ漆を塗っただけのものです。そこに貝殻等を貼った繰り返し模様は和紙にもあるので、和紙の折り紙を子どもたちに渡してみるのも一つの手だと思います。

螺鈿は先生方でも材料から作るのは無理ですが、２０００年も前から螺鈿の技術はあり人間がそういうことをやったという事実や、ただの箱に美を生み出した人間の素晴らしさや美しいものに憧れて美しいものを創り出すという能力に気付かせると更に深くなります。もう１時間　行い鑑賞や知的な理解をした方がよいです。科学の創造性は機能ですが美術の創造性は　美の創造です。美術は心の教育と言えます。

また、生活の中にある螺鈿の模様をデジカメ等で撮り、授業の１,２週間前から教室に貼っておくと導入の時間が省けますし、イメージを先にもってパソコンで出すことによって理解の仕方がもっと違います。１ヶ月位前から情報を提示し子どもたちに調べさせると興味がでると思います。

この授業で大切なのは、生徒が伝統的なよさと人間はなぜ模様や飾りを作ったのかということを認識できることです。評価の際、出来上がりよりもデザインの意味を理解し何を学び取ったかという事が重要です。日本のよさに気付けば海外に行った時に日本との違いを意識できます。国際理解というのは同じになることではなく違いが分かるということです。伝統文化の授業をもっと増やしていって欲しいです。螺鈿は応用が沢山できます。鑑賞だけでも紙の上のデザインをさせるだけでもいいと思います。

研究授業５	学校名	練馬区立上石神井中学校	授業者	黒田　一三
テーマ	みんなの美術　～感動と創造は未来を拓く～			
領域	デザイン・工芸	題材	ペーパークラフト～紙から生まれる想像の世界～	

＜１＞題材設定の理由

私たちにとって紙は古来より親しまれ、造形素材として大いに活用されてきた。折る・切る・貼る・ねじる・編むなどの可塑性がとても豊かであり、加工方法を工夫して紙特有の味わいや親しみを感じることができる。

中学校では、自由な発想による情景を絵画で表現することは多いが、紙を使って立体的に表現することは意外と少ない。箱という空間に、紙を平面・半立体・立体の自由な形で組み合わせ、自分のイメージを表現させる。生徒は紙を加工する中で、表現方法の意外性や楽しさをあらためて発見することがとても多い。

本題材は、自由な情景を表現するなかに新たな感動が生まれ、創造の喜びが味わえるものとして設定した。

＜２＞指導目標

・自由な情景を発想し、紙の特性や美しさを生かして表現する楽しさを知る。
・紙の加工方法を工夫し、効果的に表現できるようにする。

＜３＞授業者自評

紙という手軽な素材であるが、題材のねらいを達成するためには、ペーパークラフトとはどういうものか、そのおもしろさを知る動機付けや立体加工の方法を理解させることが指導の重点である。

特に指導する上で常に考えなければならないのは、生徒が考えたアイデアをどのようにして立体加工させていくかである。その工夫次第で生徒の関心・意欲は高まり、表現方法の意外性や楽しさを味わえるが、逆に行き詰まって作業がストップする姿も見られたりする。事前に立体にする方法をプリントにより図で示したり、実際に作って見せることで理解させ、その後は机間巡回により個別に対応する。生徒の持っているイメージを教師も十分に理解したうえでの指導が不可欠である。指導を受けてあらたに試行錯誤する姿に生徒の主体性や創造性が培われていく。

今回の研究授業では、事前指導の時間が十分に取れなかったために、生徒がどのくらい理解して取り組められるかが心配であった。事前に課題を提示しておき、本時ではそのアイデアスケッチを基にして、立体表現

に取りかかることになったが、生徒の関心・意欲は高く、たった一時間ではあっても、創造する楽しさを味わうことができたのではないかと思う。学習意欲を高める題材のひとつである。

＜４＞質疑応答

Ｑ：取り組みのなかで、抽象的なものはでてくるだろうか。

Ａ：子どもたちの発想は具象が多い。抽象的な表現をする生徒もいるが、抽象の概念はない。

Ｑ：ペーパークラフトの取り組みは、いつも３年生か？

Ａ：やはり３年生のレベルだと思う。参考例を示すのは最小限にして、子どものつまずきを見つけながらアドバイスしたほうが理解を得やすい。自分で紙を用意する子もいる。

Ｑ：子どもたちを授業にひきこむ方法を教えて欲しい。

Ａ：素材の親しみやすさが前提にあるが、生徒の関心・意欲は高い。やらない子は立体表現をどうしてよいのかわからないので、アドバイスをする。

＜５＞ご意見・ご感想

＊黒田先生のペーパークラフトは、いつも区展で注目していた。中学校は、紙を使う作品が少ないので、私も授業でポップアップ（グリーティングカード）を制作している。子どもたちは紙という素材が好きなようで、色がきれいなのも魅力である。

＜６＞ご助言　　元稲城市立稲城第六中学校長　　森田　勝也先生

授業者の先生の言葉が柔らかく、わかりやすかった。ねらいも明確だった。子どもたちは、改めて紙という素材の美しさや良さに気づいたのではないかと思う。子どもたちの充実感が伝わり、魅力ある授業だった。

紙には制約があるので、その難しさはある。今回のテーマの「顔」の場合、紙で顔を説明するのか、紙の素材や美しさを体感させたいのか、どちらになるのか。

また紙という素材が、週一時間の授業で 10 時間以上かけるメリットはどのくらいあるのか。苦手な子は無理があるのではないか。それを考えると、ペーパークラフトは体感できればよいのではないか。現状では、ペーパークラフトで何を追求するのか考える必要がある。

美術とは何を学ぶ教科なのか。感性を養い、造る喜びを味わうのが美術である。

ペーパークラフトは、こどもたちが将来美術へ向かう機会を考えるのに、示唆に富んだ授業であった。美術を通して、自分の良さを知る授業ができるとよい。

研究授業６	学校名	中野区立中野富士見中学校	授業者	志手　伸圭
テーマ	みんなの美術　～感動と創造は未来を拓く～			
領域	絵画	題材	空想画	

＜１＞題材設定の理由

学習指導要領の目標に続く内容Ａ表現の中に「ア、対象を深く見つめ感じ取ったこと、考えたこと、夢、創造や感情など、心の世界をスケッチに現す」とある。この内容には、“空想画”は適切な題材である。また、中学生の発達段階として、生徒の多くは自分な　りに空想の世界に思いをめぐらすことを好む傾向があり、興味・関心を引き出すには良い題材である。この二つの理由から、この題材を設定した。

また、“空想画”とは表現のための総合的な発想力と技能が必要となる難しい課題である。感性が最も成熟している、３年生の後期の時期に設定するのが妥当だと考えた。

＜２＞指導目標

・空想画に関心をもたせ、既成概念にとらわれない自由な発想を、自分なりに表現しようとする態度を身に付ける。
・発想の視点や発想の手立てを理解し、考えたことや夢、想像から発想したことを明確にするための、様々な工夫をする能力を身に付ける。
・作品鑑賞を通して、作品の知識を得るとともに、作者の意図、表現の工夫などについて具体的に感じ取る能力を身に付ける。

＜３＞授業者自評

本時では絵画（空想画）の発想段階の指導を行った。絵画の技能（技法）についての指導は行いやすいのに対して、絵画の発想の指導は行いづらいと感じているため、研究する必要を強く感じている。

本時の学習活動は、空想画の定義や発想の手立てを探る「演習課題」、より良い作品を作り出す手立てを探る「鑑賞」、自身のアイデアを実際に表現する「スケッチ」という３つの活動を組み合わせた。「演習課題」「鑑賞」の活動が、「スケッチ」に生かされることをねらった組み合わせとなっている。

結果的には、中盤の「鑑賞」の活動は必要がなかった。生徒のイメージとかけ離れた作品を鑑賞しても、発想の手助けにはならなかった。生徒一人ひとりのイメージに合わせて、もっと話し合う活動を行うべきだった。また、通常の授業で行っているように、

グループ編成をし、話し合いながらイメージを広げていく活動も行うべきだった。

「演習課題」では“空想の中の木”をテーマに発想段階を分けて指導を行った。発想の段階で生徒に行える指導の工夫として、細かく発想の段階を分けて考えるという方法は有効であったと思う。ただし、その段階の分け方にもう少し工夫が必要だったと思う。

最後の、「スケッチ」の段階では、大勢の参観者の中、いつもと違う緊張感を感じながら、生徒たちは自分なりに精一杯がんばって発想しようとしていた。そんな姿を見ると、良い作品ができるのではないかという期待をもつことができた。

発想段階の授業を行い、研究協議の中でも様々な意見を聞くことが出来てよかった。今後も発想の段階の指導方法について研究し、これからの授業に生かしていきたいと思う。

＜４＞質疑応答

Ｑ：何が一番空想画をテーマにして難しいか？

Ａ：発想を引き出すアプローチが難しい。現実に縛られるところがある。漫画の一コマやどこかで見たことがあるというようなものに、似てしまうところがある。逆にどう発問すれば引き出すことができるか教えて欲しい。

Ｑ：鑑賞の能力を評価するには？

Ａ：どれだけ知識が身に付いたか、どれだけ読み取ることができるかはテストではかる。ワークシートは評価しやすい。また、ワークシートは、自分の授業内容の振り返りの資料ともなる。

＜５＞ご意見・ご感想

＊パソコンを利用してのネット検索などでテーマを引き出していくのはどうか？

＊花の絵の向こうには・・・などの考える練習は空想画では重要だと思った。

＊言葉やモチーフなど生徒の興味があるところから引き出すことがわかりやすいと思った。

＊志手先生の作られたファイルは評価にもとても参考になる。視聴覚機器やパソコン、プロジェクターなどの活用も素晴らしい。お互い、どうやったら生徒のアイデアを引き出せるか、が課題だと思う。透視図法をつかったり、黒板を利用して例を描いてあげるのも良い方法かもしれない。

＊美大では、ワークシートの指導を重視しているがそれだけにとらわれる指導もいけない。もう少し動きのある授業をやって欲しい。

＜６＞ご助言　　元八王子市立長房中学校校長　　入谷　弘先生

まずは、導入が大切。教師が少しふざけるくらいの役者にならないといけない。いかに生徒を引きつけることができるか。生徒と一緒になれることが大切。卒業文集にのることでやる気になる生徒もいるかもしれませんね。

講評

１　誌上発表について

練馬区立光が丘第一中学校副校長　　増田　裕子

①「写真を元にしたポートレート」（領域：デザイン）
中野区立第九中学校　　田中　千鶴先生
②「どこでも展覧会～スクールミュージアム～」（領域：鑑賞）
練馬区立豊玉中学校　　高村　輝美先生
③「フォトコラージュ」（領域：デザイン）
杉並区立高南中学校　　高原　　都先生
④「削り出しによる箸制作」（領域：工芸）
杉並区立東原中学校　　林　　智美先生
※内容につきましては、『大会紀要』をご参照ください。

今回、紙上発表された４つの実践内容は、デザインや工芸、鑑賞と一律ではない。しかしどの実践にも共通していることは、生徒たちに自分たちの身近にあるものを、美術の授業の中で大切なものとしてしっかりと認識させている点、また、自分なりの表現や鑑賞の過程をとおして、生徒一人一人が学習した成果を実感させている点である。

表現と鑑賞の２つに分けて考えてみる。まず表現の分野では、デザインや工芸の誌上発表者が、いずれも生徒が表現する意欲や関心を持ち続けるために工夫している姿が見て取れる。それが生徒にとって思い入れの強い人物を描くことであり、写真を使ってコラージュすることで比較的簡単に再構成する楽しさを味わうことであり、また箸という毎日の生活の中にあるものを実際に制作することを通して身近なものへのまなざしを深めるという結果につながっている。一方、鑑賞の発表者は、地域の美術館と連携した取り組みを行っている。生徒一人一人が同じ作品に対しても感じ方が違うことや、あるいは似ていても違う言葉の表現を通して鑑賞している姿が見える。そこには、作者の心情や製作意図を感じ、グループで鑑賞することで生徒がお互いに作品に対する思いを伝え合うことで鑑賞の力を養っていく過程がある。自分に自信をもちづらい時期でもあり、自分はこう思うとはっきりと言い出せない生徒たちでも、グループでの鑑賞というかたちを通して様々な角度から深く鑑賞したという満足感をもたせている。

美術の授業では、個人の制作過程や鑑賞力が求められるように思われがちである。しかし中学校という義務教育の集団生活の中で、お互いの違いやよさを認めることで、自分のよさや特徴を理解することができる集団の力は大きいと考える。また、「実生活の中で生きる美術の力を育てる」という点でも、今回の４つの実践は、学習指導要領にある基礎的・基本的な力を育てるための切り口としては非常に有効な発表であったと思う。

４人の発表者に敬意を表するとともに、これからも実践を深め、生徒たちにしっかりと力をつけさせてほしいと願っている。

会場に展示された生徒作品

２　実践発表について

練馬区立大泉第二中学校校長　　園田　俊雄

① 板金レリーフ『動物絵皿』　〔２年工芸〕

発表者　練馬区立大泉学園桜中学校　塗木　興一先生

生徒が興味・関心をもって取り組める題材である反面、打ち出しすぎて穴を開けてしまう危険性もある。この題材でのねらいをしっかり把握させることが重要である。特に、表現のし方、道具の使い方、研ぎ出しによる明暗表現の理解等をしっかりさせることである。本題材では、用意周到な準備ときめ細かな一連の表現展開に注意を払って指導していることが伝わってくる。同時に、作業中の金属を打ち出す音や生徒の真剣な顔の表情など教室内での様子が目に浮かんでくる。参考として授業後の生徒の感想があればよかった。

② 動物のイメージの守り神（埴輪）　〔１年工芸〕

発表者　杉並区立天沼中学校　青地　敏子先生

土をいじることは人間の本能といってよいほど楽しさや喜びを与えてくれる。本題材は、生活の中から離れた工芸に関心をもち、感性や美的感覚を働かせてそのよさを感じ取らせることからスタートしている。特に、心象的な形に仕上げるためにも導入の段階が大きなポイントであり、その点大変工夫されていて、生徒個々にしっかりイメージ化が図られている。作品からも誰一人として同じ形のない発想や表現の素晴らしさを見ることができる。きめ細かな指導展開の中に授業者の綿密で周到な力が垣間見える。

③ 心の目で円を描く　〔１年デザイン〕　発表者　杉並区立井草中学校　山中　潤子先生

色彩学習の基本的能力を学ぶ題材で、特に自由な発想から自分らしく素直に色彩表現を学ばせるところがねらいである。導入の段階でゴッホの作品を通して見方を広げ、作者の心情や意図から表現の工夫を感じ取らせているところに授業者のねらいや願いがよく表れている。イメージが決まらない生徒は必ずいるもので、その手立ての工夫もされている。中でもイメージを言葉で伝える発想は工夫され、それが次の段階の形や色の表現につながっていく展開は、大変参考になるものといえる。

④「31 枚目の動植綵絵」伊藤若冲「動植綵絵」　〔３年 B 鑑賞〕

発表者　アートエデュケーショナルプランナー　山内　舞子先生

伊藤若冲の作品は、構図、形、色、絵画的効果の独創性、絵画的手段の単純さなど大変目を見張るものがある。作品はもとより作者の作風や個性に注目させ、その特徴を一枚の画面に表現させて授業を展開させているのが授業の大きな特徴でもある。最終的には、作品を通して作者の心情や意図、創造的な表現の工夫などを感じ取り、見方を深めることによって、興味・関心をもたせることが鑑賞の目標でもある。その意味では、今までとは違った鑑賞授業で新鮮な気持ちで聞き入り、興味を抱かせてくれた内容であった。

３　研究授業について

杉並区立高井戸中学校副校長　　曽根　信行

今大会は研究主題として「みんなの美術」を掲げ、実践的な学習指導を通して、いかにしたら生涯にわたって美術を愛好する心情や姿勢が身につくかということを追求してきた。現状では「美術は苦手」とか「不器用ですから」という声をよく聞く。その範囲は、学校の生徒のみならず社会人の中にも多い。例えば、音楽なら「楽器はだめでもクラシック鑑賞なら教養面も身に付くし、カラオケもあるし『愛好している』という状況である」と答える人が多いのではないだろうか。その点、美術を取り巻く状況は厳しい。

今大会は、こうした状況を踏まえ「今までの授業実践を見直す契機として」「基本的な視点に立ち返り」「目指すべき美術の学力についてコンセンサスを確立」するために研究授業を実施することになった。

研究授業の詳細については、研究協議１から６に譲るが、大島教諭の「皮革レリーフ」デザイン画の鑑賞で、作品発表と相互評価活動による自己実現ためのスパイラル的な指導が行われたのをはじめ、藤嶋教諭の「自然物の模刻（着彩）」では、モデルと制作物との継続的な比較による美術本来の手仕事の本質に迫ろうとした指導が、三浦教諭の自画像「デッサン」では、思い入れのいっぱい詰まった自分の写真をモチーフとし、手の脱けない「色鉛筆」を材料として全力で一気呵成に描き出す指導がそれぞれに行われた。また、渋谷教諭が行ったＰＣを介在させた文化遺産・伝統工芸品の鑑賞を通して、アイデアスケッチの構想を練らせつつ文化遺産を大切にする心情を養う「螺鈿細工の導入とアイデアスケッチ」の指導と、平面作品の材料として使用されることの多い紙を使った黒田教諭の「ペーパークラフト」での「太鼓貼り」「箱づくり」等立体化の方法を教授しながら、試行錯誤の中から自分のイメージにあったクラフト制作させる指導は、これからの指導法の新たな展開例を示したものになった。最後に志手教諭の「空想画」の指導は、教師と生徒が一つの方向に一体化して知恵を出し合い表現活動していく意識や意欲の高まりを感じたものであった。とかく美術の制作は、共同制作を除けば、個々が自分の才能と能力で制作していくイメージがあるが、この授業はまさに今回のテーマ「みんなの美術」の妥当性やこれからの方向性を示したものと言える。

誌面の関係で、研究授業全体を通した感想を述べる。

①　どの研究授業会場も熱心な関係者であふれかえっていたこと。このような多くの参観者があった研究大会は私としては寡聞にしてはじめてであった。

②　どの授業者もワークシートが用意され、制作への道筋がはっきりしていた。２２頁にも及ぶの手作り小冊子のワークシートもあり、敬服した。

③　どの授業者も授業中すごく優しい。しかもパワフルに全力で個々の生徒を指導している。美術授業の本質を再認識させられた。

今回の研究授業は、どれをとっても素晴らしいものであったと考えている。美術教育に携わるものとして大切なことは、今回のような授業を皆が継続していく努力を惜しまないことである。その努力の汗が美術教育の未来を拓いていくのである。

全体会

主催者挨拶

都中学校美術教育研究会会長 日野市立平山中学校長　正留 久巳

第２４回東京都中学校美術教育研究大会第３ブロック中野大会の開催にあたりまして、ご挨拶をさせていただきたいと思います。次期教育課程改訂を前に、依然として学校現場の大きな課題は「生きる力をどうやって子どもたちに身につけさせるか」です。引き続いて我々の大きな課題であると考えます。

昨今も心痛む事件が続いています。学校教育にあっては、一人一人の生徒の心のひだをつかむ教員でありたいし、社会においては、子どもたちの手本になれるような、大人としてのあり方が正に問われているのかなと考えます。美術教育においては、その活動を通して自分を発見したり、自分の良さに気づいたり、他の良さを感じ取ったりできる教育。これは美術の教科が持っている特性でもあります。我々美術教員は、そこを心してかかるべきと思います。今中学校の学校現場においては、美術の先生がいない、講師の先生で対応している学校も多くあります。各学校ひとりしかいない教科でもあります。だからこそこの研究大会を毎年しっかりとやっていくことが、とても大事だなと感じています。

午前中の実践発表、研究協議には多くの方に参加をしていただきました。ほんとうにありがとうございました。今我々に求められているのは、美術の教科の目的をしっかりつかみ、より効果的な指導法を身につけることだと思います。今東京都は指導力向上ということで、全教科で取り組んでいるところです。美術教育にあっては、今までの先輩が築いてくれた題材であるとか指導法であるとかを再度検証し、短時間の中での子どもたちへの指導に生かしていくということが強く求められていると思います。ぜひこのような研究会を通じて、我々の指導力をアップしていきたいと思っています。今回の研究のテーマは生きる力をどう子どもたちに身につけさせるかということでもあったと思います。表現をするということは、いろいろな表現の仕方がありますが、ものを手で触ってそれを感じるということは、美術の教科でしかできない、そこを大事にしていきたいと思います。最後になりましたが、本研究会に先立ちまして、側面からいろいろなところからご支援いただきました。東京都教育委員会、中野区・杉並区・練馬区からも一年間にわたって多くのご支援をいただきまして、この研究大会を開くことができました。感謝申し上げたいと思います。それぞれの教育委員会の先生方にもいろいろとご指導いただきました。本校の牧井校長先生には実行委員長としてこの大会の成功に大きな力を尽くしていただきました。第三ブロックの先生方、きょうまでのご苦労を明日の糧としていただきまして、また全都にこの研究を広めていきたいと思っています。今朝一番にありがたいなと思ったことは、寒いテントの中で中野富士見中学校のＰＴＡの方々が、受付をしてくださいました。富士見中学校とＰＴＡの連携の絆を見させていただき、感銘を受けました。またきょうは遠藤先生にたいへん示唆に富んだお話をたくさんしていただけると思います。たいへん楽しみにしております。遠藤先生よろしくお願いいたします。

実行委員長挨拶

大会実行委員長 中野区立中野富士見中学校長　　牧井　直文

このたびご来賓の皆様、多数の先生方をお迎えし、第２４回東京都中学校美術教育研究大会第三ブロック中野大会を開催できますことは、たいへん喜ばしく意義のあるものと感じております。このところ多くの学校で授業改善が主要課題として取り上げられ、校内研修の充実を図りながら、学力向上・授業力向上に力を入れているところです。教育改革が進む中で確かな学力育成への取り組みが学校現場で広がっています。このような状況の中で、美術の先生方にはすこし距離がある、遠いところの話ととらえる傾向もあります。しかし現実には美術が苦手と思っている子どももいるんですね。保護者の中にも、美術の授業にどうやって取り組ませたらいいんでしょうか、と疑問を投げかける方もいらっしゃる。授業改善は美術科にとっても課題であると考えています。先生方の教科指導力の向上は、これからの美術教育を考える上で避けて通ることのできない問題であると考えます。もう一度美術の授業で身につける学力は何なのか、という基本的な視点に立ち返って、日常の授業を見直し、目指すべき美術の学力への認識を深めて共通理解をしていく必要があるのではないかと考えます。

本研究大会のテーマ「みんなの美術」は美術教育のあり方、授業改善への思い・願いが込められています。本大会の研究成果をもとに、表現活動鑑賞活動の実践的な指導を通して子どもたちの能力の伸張をはかるべく、ともに頑張っていきたいと思います。中学校美術教育の一層の充実を目指して、美術の教科性を確かなものにするという成果をお持ち帰りいただければと思っています。きょうは肌寒い中、本校にご来校くださいましてありがとうございました。

来賓祝辞

中野区教育委員会教育長　　沼口　昌弘様

第２４回東京都中学校美術教育研究大会を中野区に於いて開催され、これまで精力的に取り組まれました研究活動の成果を発表されましたことを、心からお慶び申し上げますとともに、敬意を表したいと思います。きょうは午前中からたくさんの先生方、ご来賓においでいただいたそうであります。子どもたちの心に響く美術教育の研究実践について考えられる機会を与えてくださいましたことを嬉しく思います。本大会の成果が、未来を担う子どもたちの健やかな成長に生かされますようよろしくお願い申し上げます。

さて人生８０年、人々が心豊かなゆとりのある生活を送っていくためには、単に経済的な余裕だけではなくて、精神的創造的な生活を営んでいくことが非常に大切であると考えます。その創造的な活動を支える感性や能力を育てる中核を担っているのが美術教育であると思います。中学生の時に、表現や鑑賞の幅広い活動を通しまして、自分の生き方を工夫することは、子どもたちが心豊かに生きていくために非常に大切なことだと思っています。

本大会が「みんなの美術～感動と創造は未来を拓く～」をテーマに、表現や鑑賞の基礎的能力を確実に身につけていくことを指導の中心に捉え、美術を生涯にわたって愛好して

いく心情を育てる研究実践に取り組まれていることは、きわめて意義のあることだと思います。子どもたちが美術の学習を通して、表現や鑑賞の感動をたくさん味わい、みんなと心を通わせながら未来を切りひらいて行くことは素晴らしいことであると思います。

本大会を実施するにあたりまして、ご尽力くださいました東京都中学校美術教育研究会会長正留先生、大会実行委員長牧井校長先生を始め、関係先生方に感謝申し上げます。

謝辞

中野区立中野富士見中学校副校長　　池田　浩二

本日は多くの先生方関係者の皆様にこの大会に参加をいただきましてありがとうございました。午前中から始まりました実践報告、教室を溢れるほど多くの先生方に見ていただきました研究授業、そしてこの全体会、開催した側からいたしますと、非常に多くの先生方、関係者の皆様の参加を驚きを持ってみておりました。きょう大会の会場とさせていただきました本校は、非常に生徒数の少ない小規模な学校です。その小さな学校ですが、校長、副校長の私、美術科３年目になる教員がおりまして、３人の美術科の教師で時々話をすることがあります。週２時間の授業があったときにはこんな作品ができたとか、生徒がこんな反応を示したとかそんな話をするんですが、それがたいへん昔のような気がします。中学生がみんな必修で美術を学んでいたんだというようなことが、昔話のように話されないような時代を作っていかなければいけないのではないか、そのような話は今回中野区の美術科の方でも同じように話題となりました。その話を受けて、今回の基調提案、テーマ「みんなの美術」を決めて参りました。

今日は非常に多くの先生方にご参加をいただきまして、また遠藤先生には、義務教育９年間の中の３年間を担当する我々が、今後どのようにしていかなければならないかという方向性、ライジングサンという励ましの言葉をいただきました。

これから美術教育を担っていくだろう学生さんを引率して下さいました大学関係の皆様、今後ますます手をたずさえていかなければいけない美術館関係者の皆様、それから多くの先生方、ほんとうにありがとうございました。感謝の気持ちを込めまして、謝辞とさせていただきたいと思います。

次回大会実行委員長挨拶

板橋区立上板橋第一中学校校長　　新保　邦明

来年度は第２５回の都中美大会となりますが、第４ブロック文京・北・豊島・板橋の４区が担当することになりました。来年は関ブロの東京大会が同時に開催され、たいへん注目される大会になるのではないかと思っております。是非頑張りたいと思います。もちろん第４ブロックの先生方には頑張っていただくのですが、会場の皆さん、それから全都の先生方にも積極的にかかわっていただき、来年度の大会を成功に導きたいと思っております。是非ご協力よろしくお願いいたします。